

うち帰還人員六三九人、戦没者二〇三人となっている。

戦争明暗体験記

京都府 矢野 美三雄

昭和十七年三月四日、私等の経理部の乗船した「東京丸（六四七トン）」は静かにフィリピン群島のミンダナオ島のダバオへ入港した。

生まれて初めてみる熱帯の島、物の本で少しは予備知識を養い、また船中で通訳等の南進商社員の話で想像の域であった夢の国南方の島は、群青の山々が濃紺の湾に映り、えも言われぬ風情であって、戦場へ赴く私等は一時的に戦争を忘れられた。

軍の建前上、私等末端の雇員はさておき、士官や高等文官等のえら（偉）さんはいち早くランチで御上陸になった。この分では停泊中に上陸のチャンスはいつのことやら。やっと三日目ぐらいで上陸の順番が来た。

上陸場は港の棧橋で、そこは日本軍攻撃で大分破壊されていたが、それでも長途の疲れを癒すために私等を迎えてくれた。それにありがたいことがもう一つあった。

ダバオ経理部の波止場でのバナナの接待で、遠来の私等にたらふく召し上がれと歓待してくれたことである。内地でも台湾バナナは口にしたが、産地で充分熟した果物の美味しさはひとしおで、若気も手伝い大いに賞味した。

上陸はやはり嬉しい。街路樹のアーチの下で色の黒い原住民がはだしで道路上に果物や現地産の細工物を並べて、何やら判らない言葉で客を呼んでいるのは、日本内地とあまり変わらない。

聞くところによると、日本軍が侵攻して来た時に、原住民のゲリラが在留邦人を襲い蛮刀を振るい虐殺をしたそうで、邦人居留民団が自警団を組織し自らを守っていた。これとて戦地戦場に見られる悲劇であると話し合った。

フィリピンの歴史を見るに、十九世紀頃には世界を風靡していたスペインの属領となり、米西戦争でアメリカ領となった。弱者はいつも圧迫され支配されるのであるから、戦争には絶対に勝たねばならない。

今次の戦争は八紘一字の精神で聖戦であるとその頃は感じていた。ダバオ停泊も数日で、また輸送船は太平洋を南下した。

戦中のことゆえ言論行動の統制は止むを得ないのであるが、それでも船中は内地の困窮耐乏は何のものか、特に海軍は「板子一枚下は地獄、一蓮托生」のたとえ通り明日の命を誰か知ろうであるから、経理部所属の酒保物品のビールにぞいたくなカニ缶詰を着に四六時中酒びたりであった。

それでも軍徴用船の輸送船であるから退役の海軍大佐が指揮官で、准士官・下士官・兵など十人ほど配置され、擬装の木製大砲で四囲の警戒に当たっていた。

波の上を飛ぶカモも忙しく魚群を追っており、賢いツバメは足に木切れの浮遊物を持って大洋を渡って行くのも徒然を慰める一助であった。

戦後になって聞いたのであるが、宣戦布告に当たって山本連合艦隊司令長官は、昭和天皇の戦に対しての御下問の奉答に「一年か一年半なら何とか頑張りましよう」とお答えしたと。

その当時、昭和十七年三月では開戦三カ月、破竹の勢いで太平洋の島嶼を席卷しつつあったとはいえ、残敵うようよとしていつ反撃に出るか知れず、薄氷を踏むの感あり戦々恐々であった。海上に流れ行くビールの空箱を潜望鏡と誤認して「配置につけ」「退避用意」の号令が出るといふ笑えぬナンセンスもあった。

海上で行き合う船舶も相互の儀礼上の信号を交わし航海安全を祈り合う光景は、話ではきいていたが事実であると勉強を一つした。航海三日にしてセレベス島マカッサルへ入港した。

船上より遠望するに原住民は皆赤色の腰巻（後日サロンと知った）をしていた。戦友たちは「これは困った。女護島だ、身体が持たん」と満悦の声をあげた。

この島は面白い形で、あたかも珊瑚虫のようであるが、なかなか物資の豊富な重要な地点であったため、

第百二海軍經理部マカッサル支部が置かれていた。

私等はその仮兵舎の土間にアンペラを敷き、任地ボルネオの陥落占領まで待機することになった。えら方の士官、高等官は海軍水交社で殿上人となり、ここでも身分階級の差をいやというほど知らされた。

夜は海軍經理学校出身の支部長である海軍主計少佐の実包の巡検が部隊並みに行われ、さすがは海軍官庁だなという実感を充分味わった。

街の見物もテガローダー（三輪車）に相乗りして面白かった。

余談であるがマライ語（インドネシア語）はすこぶる面白い。たとえば人はオラン、飯はナン、魚はイカンというので、実生活に不利益な言葉で不便を感じたものである。

後日のことであるが、私の担務は金銭会計の予算決算で現金扱いであったので、原住民と接触の多い契約や物品の係はその立場上言葉の研究や実習もあって、従軍四年四カ月間の後の引揚げの頃はひとかどの通となり、下手な通訳顔負けであった。いかに生活が大切

で日頃の経験や学習が役立つかを知らしめられた。

一時滞在のマカッサルもスラバヤ沖海戦で蘭軍が降伏し、任地のボルネオのバリックパバンへ進出可能となったので、十日間お世話になったマカッサルの親切な支部の職員に後ろ髪を引かれる思いで別れを告げた。

任地は暑い暑い赤道直下であったが、バリックパバンの名は板が波によって打ち返されるという誠にセンチメンタルな名の閑かな都市であった。

世界に名だたる石油の産地で、海の中にも槽を建て採油し精製して、重油軽油に区別されていた。高台には油のタンクが林立し壮観であった。

内地では徳山燃料廠が有名であったが、この地には第百一と第百二の燃料廠が置かれ、軍艦・船舶の重要な油の補給地であった。三月二十七日上陸即日開庁した。

それからの設営が大変であったが、まず電灯線は占領戦によって切断され真っ暗であったのでろうそく暮らしてであった。マラリア蚊防ぎのため蚊帳をつり、炊

事は主計科のお手のものである生鮮野菜や魚介の買い出しや調理が行われた。

宿舍割りも山の上のBPM（和蘭石油会社）高級社員宅には士官が入り、海岸には判任官宿舍や雇員宿舍が六棟ほど開かれた。

文字通りの官舎住まいであったが、官の施設へ入居しての宿舍手当支給、まさに二重取りであった。海軍の生活、食事は前にも少し述べたが本当に贅沢そのものであった。朝昼晩と山海の珍味が出て、夜はビールの酒盛りでこれでも戦争中かと思うほどであった。緒戦の戦勝気分が敵反攻まで続いた。

それでも軍隊である。朝の課業整列から宣誓訓練後、それぞれの配置に就いて業務に励んだ。午前中は約三時間で、酷暑のことゆえ昼食をはさんで約二時間午睡をし、少しく暑気を払ってから午後の勤めに入り午後四時頃には終了で、後に別科として軍歌、バレエ、野球となかなか活発であった。

開庁日まだ浅い四月十二日に恩賜の煙草を下賜され感涙にむせんだ。

多額に発行された軍票も、南方開発金庫が日本銀行業務を行うまでは経理部が代行で、艦船部隊の経理分割と軍用郵便所資金交付に多忙であった。経理部の当直室の一室が金庫となり何百万の軍票と同居、一夜を共にするという冷たくて責任の重い仕事であった。

私は雇員の先任であったので当直配置で、後輩の雇員が副直であった。戦中とはいえ忙中閑ありの毎日、昭和十七年五月頃になると、草深い田舎の温帯の日本より酷熱の熱帯の生活、毎日スコールはあって気候的には少しく変化はある。しかし毎日が単調で、女々しいが私は無性に内地に帰りたい気持ちになったが、志願して従軍したのにこれではならじ、時局を認識せよと自重自戒したのもその頃であった。

そこで私は心機一転、海軍の法規の即ち憲法である会計法、海軍会計、法規程特例の勉強を始めた。南ポルネオは陸海軍協定にて海軍担当地域で、海軍が占領して治安回復と同時に海軍民政府がセレベス島のマカッサルに置かれ、下部の組織として海軍民政部が出来、各省より海軍司政官や海軍書記として転官した文

官が民政を行っていた。特に記憶に残っているのは、私等経理部も軍の会計経理の元締めであるのでその立場上、「占領地の金融や経済の状態を研究せよ」との上司の命令で民政部や進出して来た新聞社を訪ね、レポートを上司に提出した。

更に苦勞したことをもう一つあげれば、私は海軍軍属で銃を執って戦うのが本分ではなく、算盤とペンが武器であった。

内地の工廠で艦船兵器の製造の工事費計算をしていた都合上、当地の砲台建設の据え付け費の計算をやれと命ぜられた。これは天から降ってきた大役だと緊張の度を加えた。

砲台建設工事には、呉海軍工廠砲煩部より技術科士官が工員を連れてきている由。それでも私は特設海軍経理部の要員として、しかも海軍各庁より転雇された指導的立場にあるので何とか完全な処理をと思ったのであるが、如何せん戦局の推移我に利あらず、敗色度を加え工事も中止となり、私の腕のふるい処なく終わった。

昭和十七年四月には帝都東京空襲、六月にはミッドウェイの惨敗、八月ガダルカナル戦開始、昭和十八年四月には山本元帥の戦死と、戦況は四六時中不利で、当地も八月十三日初空襲を受けた。

八月十三日、当直の同僚雇員の「敵襲！敵襲！」の連呼で平和の夢は破られた。この当直員は陸軍現役として支那大陸に連戦をした勇士で、戦馴れをしていたので空襲の通報も速く、この点手柄であった。

私等はあまり空襲の知識や訓練を受けていなかったが、取り敢えず宿舍の横に掘ってあった蘭軍の壕へあわてて退避したのである。

空襲の珍しさのあまり、私等は壕より顔を出して、防空砲台より打ち上げる砲弾の閃光や轟音を、対岸の火事見物のように眺めていたが、米軍の威力たくましいB24は堂々と高空より爆弾を投じて引き揚げていった。

その後の発表で被害戦果なしと、まあまあ引き分けであったが、翌日の朝礼に当たって支部長より空襲の際は「絶対に壕より顔を出さな、鍋のかげらのような

砲弾の破片が落下し、味方弾で戦死するという不体裁にならざるように」との注意があり、なるほど戦地だなと身の引き締まる思いであった。

初空襲後、数回の少数機の夜間空襲があり多数被害が出たが、本格的な大規模空襲は、昭和十九年九月三十日から始まったB 24の七十二機による大空襲である。この日、港には退庁帰還する女子理事生を乗せて翌一日出航する「氷川丸」も停泊していた。この後、十月三日二回目、十日B 24の百七機、P 38の十一機、その他十六機、十四日B 24の九十八機他、そして十八日と続き、後は散発的となった。

これらの空襲により、燃料廠が相当な被害を受けたが、友軍の戦闘機も勇敢に迎撃し戦果をあげたようである。

横道に入るが、戦地銃後共に「挙国一致」「撃ちてし止まむ」「欲しがりません勝つまでは」と、一億火の玉となって一家の都合や悲しみなどは忘れおいて国事に奔走した時ではあるが、私にとって一番悲しいことは実母の病死であった。

それも奇しき因縁、肉親の情とでもいうべきであろうか、十月十日の大空襲である。運命の日というか風前の灯の日、九月三十日より十月一日に及ぶ大空襲を避けて経理部部长以下の幹部職員や理事生が庁舎前の防空壕へ取る物も取りあえず眼をふさぎ耳を覆っておのきひそんでいた。今回はB 24の七十二機、私らにとっては最大の空襲であった。

一トンか五百キロ爆弾か定かではないが、白亜の道路に落下する度にどかんどかんと五体にこたえ、爆風も激しく周囲の土居の土砂がばらばら落ち、ああ今日でもう二十八歳の命も終わりかと観念したものである。

その日母は農家のことゆえ、秋の収穫に忙殺され、食糧増産の女戦士として猛暑の稲刈りに田圃へ出ていた。生来心臓が弱くよく肩がこると言っていた母が、私が防空壕で神仏に命乞いをしていた午前十時丁度に身代わりで死んだ。

命をながらえたのも、母の身代わりというわが子可愛さの一念、眼に見えぬ糸のおかげと思っている。

昭和二十年六月十五日、招かざる客である豪州軍艦隊三十数隻が艦砲射撃をしつつ来攻した。それ以前に私等は聴取嚴禁のインド放送でもう負けだとはうすうす承知していたが。

現地海軍最高指揮官により「千早二号作戦」発令、即ちボルネオの奥地への引き下がり戦法である。経理部保管の機密文書の焼却も大変で、庁舎前に穴を掘り暑い午後全員で焼いた。

この苦しい作業に当たって、常日頃から海軍志願の下士官が、二年現役の主計科士官の命令にまっすぐ従わず、悶着の一場面もあったが、私はこんな時は上下心を一つにして承命し、最高度に戦力を発揮すべきであると感じた。

転進作戦もまだトラックが動いていたので、マットを積んだり衣料もいっぱい積み込んだ。私は上陸以来の、「私本戦時日誌」も大切に持っていたが、これは引き揚げの際「持ち帰りは許さぬ。違反者は戦犯だ」と脅かされ焼却したが、自分の戦争資料を失ったのは残念であった。

敗戦後の裏話も数々ある。

本来からいえば海軍の軍医科や主計科は軍令を行わないのであるが、戦線混沌と乱れた折、野戦隊の編成上、上級者なるゆえ主計少佐が大隊長を命ぜられ、スパイ行為をした原住民を無差別に処刑した廉ゆゑにより死刑となった。また、陸軍の憲兵に相当する特警隊長の特務大尉が、軍律会議を経ずして原住民を斬首し、もう自分も死刑は免れぬと自決されたのは気の毒であった。

私は職務上、軍用郵便所とも関係があったので、終戦後の抑留中、法務官と同行し不正に取得した現金を軍用郵便貯金に預け入れた不心得者の摘発に回ったが、あわれその法務官も戦犯指名を受け刑場の露と消えたと聞く。

昔より「勝てば官軍、負ければ賊軍」のたとえが日本にあるが、第一次大戦より端を發した戦争犯罪が今次大戦で表面化したのは、時代の流れの一端であると言うべきか。